

仲間と近所の線量を計測していた。最初の頃は怖くて福島に入れなかった。6月くらいから子どもたちを放射能から守る福島ネットワークのイベントの手伝いを行なうようになったのがきっかけだ。

【阿部さん】2011年8月に京都大学助教の小出裕章さんの講演会が福島であり、参加した。そこで再開した同級生が、子どもたちを放射能から守る福島ネットワークと市民放射能測定所で活動していて、彼に誘われたのがきっかけだ。

【清水さん】福島県内に測定所ができてきて、測定を依頼する人が減ってきている。緊張感が薄れていくことも危険なので、どう啓発していくかが課題だ。

震災を振り返って

【清水さん】事故当時の政府の原子力問題への対応について、マスコミも政府から言われたことを伝えるだけではなく、自分たちの基準で発言してもよかったと思う。結局、避難するか・しないか

は自分で決断しなければならない。政府をあてにせず、自分の身を守るのは自分の判断なのだ。市民の力で変えていかなければいけないと、デモも盛り上がっている。現在は放射能の問題は落ち着いているが、表面化するのは数年後だ。事故になった時、放射能に対する知識があるかないかで行動は大きく違ってくる。原発付近に住んでいる人は予め知識を得ておかないと、自分の身は守れない。事故が起きてから勉強しようとしても間に合わない。初期被曝をいかに避けるかが大事だ。

【阿部さん】これまで漠然とながら国を信用していなかったが、今回の震災で確信が変わった。自分の身は自分で守らなければならないというのは同感だ。一時東京に出ていたが、震災を機に自分の地元・故郷を再認識し、福島に戻ってきた。自分の生まれ育った場所がこういうことになり、地元への思い入れが再確認できた。都市の繁栄を維持するために存在している田舎。原発に代表されるように、受け入れなければならないことはあまりに割が合わな過ぎるのではないか。一度事故が起きてしまえば自分の子どもが死ぬまでも帰って来れなくなる場所になってしまう。その点を、踏み込んで考えるべきだと思う。

NPO

環境カウンセラーとして伝え続けた被災地の状況

南相馬市

長澤 利枝 NPO 法人福島環境カウンセラー協会

取材日 2012.09.11

地球環境の保護・改善に対して、行政、事業者、市民団体及び一般市民などと連携し、環境保全意識の高揚、環境経営の構築・推進、人材育成等の方策に関する事業を行ない、現在及び将来に係る人類共通の課題である地球環境保全に寄与することを目的に設立された。震災後は避難所を訪問し避難者のメンタルケアを中心に様々な支援活動を行ってきた。

3月11日 14時46分

別棟の2階で書道教室を開いている。教室の準備をして生徒を待っている時、地震が来た。初めはたいしたことはないだろうと思ったが、やがてもの凄い揺れとなり、慌てて外に出て母屋に戻った。自宅は高台にあり、母屋からは海が見渡せる。3時30分頃、夫が海の方に真っ白な砂埃を見た。松の木よりも上まで舞い上がっているのを見てあれは何だろうかと首をひねっていた。そのうちに高台を目指して逃げてきた人の車で隣の空き地はいっぱいになった。

みんなが海の方を見ていた。直後に津波の第一波が到達し、その様をただ呆然と見ていた。国道6

号線より太平洋側の地区は壊滅状態となった。その夜は空き地に避難してきた人たちのために2階を開放し、何とか用意できたおにぎりを食べてもらって一晩を過ごした。

逃げてきた人たちに聞くと、防災無線は聞こえなかったという。この地域の人たちは過去にも津波の経験がほとんどなく、来ても50cm程度位の認識だ。大丈夫だろうと自宅に残っていた方たちが皆犠牲になってしまった。逃げてきた人たちは第一波を見ながら逃げてきたという。私の住んでいる地区でも30人近くが亡くなった。まさに想像を絶する光景だった。

津波が引いた後、書道教室に兄妹で通う生徒の両親と祖母が訪ねてきた。祖父が学校まで迎えに

行ったが2人とも見つからず、あらゆる場所を探しているという。後日、2人とも津波にさらわれてしまったのだと聞いた。

福島第一原子力発電所の水素爆発から避難まで

3月12日に福島第一原子力発電所の水素爆発が起こった。停電でテレビが見られなかったこともあり、どうやら原発がやられたので逃げた方がいいと前の家の人から知らされた。猫を2匹飼っていて、娘は事故で体が不自由なこともあり我が家はすぐに避難することは難しく、様子を見ることにした。家は原子力発電所から21km地点にあり、この地域は屋内退避区域に指定された。行政も避難を勧めていて、12日の夜から周囲も避難を始めた。気づけば近所の老夫婦と、我が家の2軒だけが残っていた。

3月16日の夜、状況を確認してから避難をしようと、情報を得るために市役所へ向かった。そこでテレビに映し出された映像を初めて見て、言葉を失った。それまではこれほどの大惨事だとは思っていなかった。夫と2人、しばらくその場から動けなくなっていた。

3月17日に市役所の広報車が回ってきた。7時から中学校で避難についての説明会を行なうという。説明会では18日に最後の避難のためのバスが出るということだった。行政も何とか市民を避難させようと必死だったのだと思う。後日聞いたところでは、とにかく用意されたバスに乗せられて、着いた先で初めてそこが何県の避難先かわかるような状況だったという。

前述した理由もあり、寝耳に水の話であったため、夫は怒りを覚えて避難バス搭乗名簿に名前を書いてこなかった。

19日になり姉とようやく連絡がつき、姉のいる埼玉への避難を勧められた。避難に必要な放射線の測定のため市役所へ向かうと、町はゴースタウンようになっていた。飼い主を失った犬や猫がたくさんいた。車で10時間をかけてようやく埼玉の戸田市へ避難することになった。

2011年5月、自宅へ戻ると

友人のほとんどが20km圏内の避難区域に住んでいた。津波で家も流され、身内が犠牲になっている人も多かった。江井地区では津波で孤立し、高台のビニールハウスに60人程の人たちが固まって寒い夜を身を寄せながら何も食べずに過ごし、翌日のおにぎりの配給時に水素爆発の音を聞いたという。その後、二次避難で市内の学校に行き4～5日生活したが、さらにその後の避難で地域の



人々はちりぢりばらばらとなってしまった。それで、なかなか連絡も取り合うこともできなかった。自宅へは5月4日に戻った。近所では一番早かった。大勢の自衛隊や機動隊が遺体捜索のために現場へ入っていた。放射能の影響で活動は休止していたが、避難している間の4月29日から再開されたということだった。

市が借りた民間企業の工場建設予定地に、水が引かずまだどろどろのままの瓦礫をダンプカーが行列をなして運んでいく。その様子を見て、どんなことが起きてしまったのだろうと恐ろしく思った。

書道教室の生徒の住んでいた家を訪ねたが、跡形もなかった。生徒自身、生徒の家族も津波と原発であの日を境に人生が全て変わってしまった。

その後は、背中を押されるように環境カウンセラーとして被災地の状況を伝え続けた。8月からNPOや環境カウンセラー協会などが、南相馬市に入り様々な支援を頂くことになった。1年6か月を経た今、多くのかげがえのないネットワークに支えられている。

避難先の生徒たち

どうしてもやらなければならないことが1つあった。書道教室26人の生徒の安否確認だ。子ども達は各地の避難先に散っていた。いろいろなツテをたどって居所を調べた。環境カウンセラーの方が用意してくれた「幸せの黄色いたけとんぼ」や手作りのお人形を持って、宮城県丸森町の避難所へも行った。再会した生徒が「会いたかった」「お習字がしたい」「戻りたい」と抱きついてきた。山梨に避難していた女の子は、朝からずっと私を待っていてくれたという。会うなり抱きついて来て、手紙を渡してくれた。「将来はお医者さんになって、必ず戻ってくる」と今も頑張っているようだ。お正月には年賀状も届いた。子ども達にとってはつらい環境だと思うが、現実

に向き合っている姿を見ると、救われる思いだ。

環境カウンセラーとして避難所を回り、避難している方々のメンタルケアにも取り組んだ。ビッグパレットでは荒れている子どもがいて、他のカウンセラー達が手を焼いていた。私は絶対にこの子と対峙すると心に決め対応した。最後には母親の手を引いて、お母さんに竹とんぼをあげたいからひとつ欲しいと、私のもとへやってきてくれた。

震災を振り返って

あまりにも大きすぎて、これから先どれくらいの時間で私たち人間はもとより、失われた地域や自然が回復するのがわからない。現在、福島県の環境カウンセラー協会の会長として福島県総合計画審議会の委員に着任し、総合計画の見直しに関わっている。意見は言えるが、自分の気持ちとかい離していてもどかしい部分もある。現場に近い私の意見に対し総合計画は「こうあるべき」という中で折り合いをつけていかなければならない。福島県の危機的な状況を考えると、私がこれまで



冊子「キッズフォトジャーナル」に教え子が掲載された

培ってきたことを意見として出し、施策の中に活かされていくようにする責務もある。本当に福島が再生するかどうかわからない状況の中、新たな総合計画が福島再生の大きな力になるのであれば、私の役割は果たせると思う。

任意団体 キーワードは「お互い様」

相馬市

小幡 広宣 相馬遊楽応援団

取材日 2012.09.11

福島県相馬市にある同級生8人で立ち上げた市民ボランティア団体「相馬遊楽応援団」。震災後は瓦礫の撤去をはじめ、仮設住宅への緑のカーテンの設置、仕事を失った方々のための支援としてアクリルたわしの製造・販売の支援など積極的に活動している。

3月11日 14時46分

建設関係の会社を経営している。3月は建設業界が忙しい時期だ。普段は現場回り、営業が主な仕事であるが当日は現場に出ている、トラックを運転していたため地震だとすぐには分からなかった。周囲の人の話を聞くと5分ぐらい続いたということだが、1分ぐらいにしか感じなかった。後ろから追突されたのかなという感覚で、赤信号で停車してやっと地震だと気づいた。現場が気になったが電話が繋がらなかったため、付近の現場を2カ所回り、元請会社の指示に従うようにと声をかけた。その後、原釜にある自宅へ戻り、大した被害が無かったことと、家族全員の無事を確認した。

ひとまず安心したが、南相馬市にある現場と連絡がつかなかったため、心配になり現場へ向かうことにした。トラックから乗り換えた自家用車のテレビでは、3mの津波警報を伝えていた。3mであれば堤防は超えないし大丈夫だろうと思っていたが、途中で10mの警報に切り替わった。相馬の堤防は確か7m前後だから、明らかに超えてしまう高さだ。南相馬へ行くにしても道路の状況がどうなっているのかわからない、行ったところですでに避難しているかもしれない。家族のことも心配になり南相馬市の現場へ向かうことをやめ自宅へ戻ることを決めた。

戻ると、妻子と義母が避難せず家にいた。義父は地区の区長をしていたこともあり消防と一緒に避難指示を出すため出かけていた。「10mの津波警